



目次

| | |
|--|----|
| 【事例紹介】 | 1 |
| 国際舞台へのパスポートTOEFL iBT®テスト —より受験しやすくなったTOEFL iBTテスト 変更点のご案内— TOEFL iBT®test: A Better Test Experience 一般社団法人 CIEE国際教育交換協議会 (TOEFL®テスト日本事務局) CIEE Japan | |
| 【事例紹介】 | 7 |
| ドイツ留学とDAAD奨学金 Study in Germany and DAAD scholarships ドイツ学術交流会 日本人向け奨学金プログラム担当 久留島 義信 KURUSHIMA Yoshinobu (Scholarship Program Coordinator for Japanese Students, German Academic Exchange Service) | |
| 【海外留学レポート】 | 13 |
| 海外医学部という選択肢 —国境を超えて医療をもっと身近に— Choices of oversea medical schools 順天堂大学附属順天堂医院 総合診療科 国際診療部 医師 尾崎 功治 Dr OZAKI Koji (Juntendo Hospital Department of International Healthcare) | |
| 【海外留学レポート】 | 17 |
| 意志あるところに道は開ける —留学を通して得られた人生経験— Where There's a Will, There's a Way. 英国ロンドン大学シティ校卒業 (金融ジャーナリズム修士号) 瀬口 美由貴 SEGUCHI Miyuki (Graduated from City, University of London, with a Master's degree in Financial Journalism) | |
| 【インフォメーション】 | 26 |
| 日本留学プロモーションビデオ公開 Video released to promote 'Studying in Japan' 日本学生支援機構留学生事業部留学情報課 (Information Services Division, Student Exchange Department, Japan Student Services Organization) | |

【事例紹介】

国際舞台へのパスポート TOEFL iBT® テスト

—より受験しやすくなった TOEFL iBT テスト 変更点のご案内—

TOEFL iBT® test: A Better Test Experience

一般社団法人 CIEE 国際教育交換協議会 (TOEFL®テスト日本事務局)

CIEE Japan

キーワード：TOEFL テスト、英語試験、MyBest スコア

はじめに

1964年に米国非営利教育団体 Educational Testing Service (ETS)によって開発された TOEFL® テストは、これまでに世界で3,500万人以上が受験し、そのスコアは150か国、10,000以上の大学・機関に利用されている世界基準の英語能力測定試験です。主に大学・大学院レベルのアカデミックな場面で必要になる英語力および学術的な課題を遂行する能力を測ります。TOEFL テストは、TOEFL® PBT テスト(ペーパー版 TOEFL テスト)、TOEFL® CBT テスト(コンピュータ版 TOEFL テスト)を経て、現在ではインターネット版の TOEFL iBT® テストが実施されています。¹

TOEFL テストは50年以上にわたる歴史の中でテスト形式の変更など改良を重ねてきましたが、2019年8月1日以降に実施される試験より、テスト時間の短縮、MyBest™ スコアの導入、受験申込を行う受験者用個人アカウントページの全面リニューアルなど、受験者にとってよりよいテスト受験体験を提供できるよう変更が加えられました。また再受験の際の受験間隔も12日間より3日間に短縮され、より多くの受験機会を提供できるようになり、スコア通知までの期間もテスト日から約10日かかっていたものが、約6日に迅速化されました。本稿では、TOEFL iBT テストの変更点、新フォーマットに対応したテスト準備教材、そして世界で利用される TOEFL テストの最新情報について紹介します。

より受験しやすくなった TOEFL iBT テスト 変更点のご案内

(1) テスト時間の短縮

2019年8月1日以降に実施されている TOEFL iBT テストは、次ページ表の通り Reading、Listening、

¹ インターネットが使用できない地域では TOEFL® Paper-delivered Testing (改定版 TOEFL ペーパー版テスト)を実施。

Speaking の3 セクションにおいて問題（設問）数が少なくなりました。その結果、全体の試験時間が従来のテスト時間より 30 分短くなり、3 時間に短縮されました。

| | 変更前 | 変更後 |
|------------------------------|--|--|
| セクション | 2019年7月31日まで | 2019年8月1日以降 * 下線部分が変更点 |
| Reading 各問題の設問数が削減 | 問題：3-4 題（各 12-14 問） 時間：60-80 分 | 問題：3-4 題（各 <u>10 問</u> ） 時間： <u>54-72 分</u> |
| Listening 講義問題数が削減 | 講義問題：4-6 題（各 6 問） 会話問題：2-3 題（各 5 問） 時間：60-90 分 | 講義問題： <u>3-4 題</u> （各 6 問） 会話問題：2-3 題（各 5 問） 時間： <u>41-57 分</u> |
| Speaking 問題数が削減 | Independent task：2 問 Integrated task：4 問 時間：20 分 | Independent task： <u>1 問</u> Integrated task： <u>3 問</u> 時間： <u>17 分</u> |
| Writing 変更なし | Integrated task：1 問 Independent task：1 問 時間：50 分 | Integrated task：1 問 Independent task：1 問 時間：50 分 |

具体的には、Reading セクションでは出題される 3～4 題に対し、これまでは各題 12～14 問の設問がありましたが、各題 10 問に削減され、解答時間も 60～80 分から 54～72 分に短縮されました。また Listening セクションでは、4～6 題出題されていた講義問題が 3～4 題に削減され、解答時間は 60～90 分から 41～57 分に変更になりました。Speaking セクションについては、従来のテストでは Independent task が 2 問、Integrated task が 4 問の計 6 問が出題されていましたが、新フォーマットでは Independent task が 1 問、Integrated task が 3 問の計 4 問になります。解答時間も 20 分から 17 分に短縮されました。Writing セクションに変更はなく、これまで通り Integrated task が 1 問、Independent task が 1 問の計 2 問を 50 分で解答します。

なお、Reading、Listening の両セクションでは、採点に含まれないサンプル問題が含まれるため、解答時間に幅があります。サンプル問題は、ETS が毎回同程度の基準でスコアを表示できるようテストを管理したり、新しいタイプの設問が実際のテスト環境でどのように機能するかを確認したりするためのものです。サンプル問題は 7 月 31 日以前の TOEFL iBT テストでも出題されていたので、

この点に変更はありません。

今回の問題数の削減・時間短縮に伴うテスト形式や出題形式、スコアスケールの変更はありません。従ってテストの信頼性はこれまでと同じく確保され、受験者の英語運用能力を高い精度で測定しています。

(2) MyBest™スコアの導入

MyBest スコアとは、受験者の過去2年間の有効な全ての TOEFL iBT テストスコアから各セクションの最も高いスコアを組み合わせたスコアのことです。2019年8月1日以降に発行される全ての TOEFL iBT テストスコアレポートには、毎回、各テスト日の試験結果（Test Date スコア）と併せて、この MyBest スコアが自動的に掲載されます。

MyBest スコアの導入により、受験者は、スコア受取先に過去2年間に受験した各セクションの最高スコアとその合計点を提示することが可能となり、その結果、より多くの大学等の志望先の出願（スコア）要件を満たすことができるようになります。また入試担当者にとっても志願者の英語運用能力をより良く知ることができ、選抜の際に役立つものと考えます。

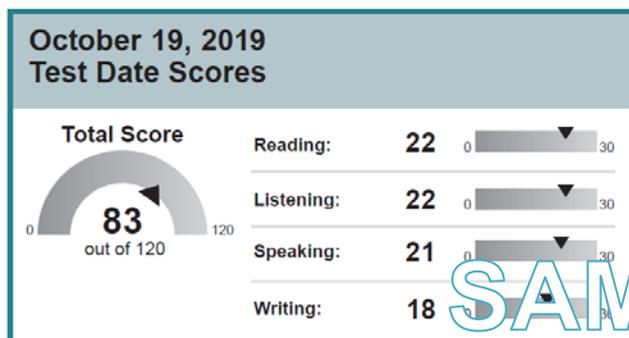
TOEFL iBT テストを2回受験した受験者を例にとって詳しく見てみましょう。下表は受験者の各テスト日のスコア（Test Date 1、Test Date 2）と MyBest スコアを表しています。例えば、大学出願のためのスコア要件が各セクションスコア 18、総合スコア 80 の場合、Test Date 1 および Test Date 2 のそれぞれのテスト日のスコアでは要件を満たしていませんが、各セクションの最も良いスコアを抽出し受験者のベストパフォーマンスを表示する MyBest スコアでは、各セクションスコア、総合スコア共にスコア要件を満たしていることとなります。

【MyBest スコアの例】

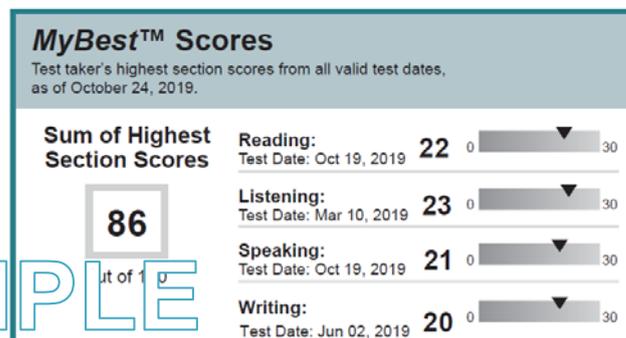
| Section | Test Date 1 | Test Date 2 | MyBest™ Score |
|--------------------|-------------|-------------|---------------|
| Reading | <u>20</u> | 19 | 20 |
| Listening | <u>22</u> | 20 | 22 |
| Speaking | 17 | <u>20</u> | 20 |
| Writing | 17 | <u>19</u> | 19 |
| Total Score | 76 | 78 | 81 |

【スコアレポートの表示例】

<Test Date スコア>



<MyBest スコア>



MyBest スコアの妥当性は、superscores に関する外部研究や ETS 独自の研究により、その他の一般的なテストスコア(直近のスコア、平均スコア)と同様であることが確認されています。² なお MyBest スコア導入に伴う TOEFL iBT テストのスコアスケール、CEFR との関連性の変更はありません。

MyBest スコアの取扱いは、スコア受取先の大学・機関によって異なります。出願の際には、必ず出願先の募集要項やホームページで要件を確認してください。

(3) 再受験時における受験間隔の短縮

これまで TOEFL iBT テストでは、再受験をする際にはテスト間隔を 12 日間空ける必要がありましたが、この受験間隔が 3 日間に短縮されました。日本では週末の土日にテストが実施されていますが、受験間隔が 3 日間に短縮されたことによって、テスト日によってはテスト会場に空席がある限りテストを受験した翌週に再受験することが可能になりました。出願やスコア提出までの限られた時間の中でより多くの受験機会を提供することは、受験者が目標とするスコアにより早く到達するための一助となるでしょう。

(4) 採点期間の短縮によるスコア通知の迅速化

2019 年 10 月 26 日実施のテスト以降、受験者はテスト日から約 6 日後にオンラインでスコアを閲覧することができるようになり、これまで通知に約 10 日間かかっていた期間が半分近くに短縮されました。また、公式スコアレポートもこれまでより早いテスト日から約 11 日後に志望団体に送付されます。

² My Best™ Scores: A Rationale for Using TOEFL iBT® Superscores
https://www.ets.org/s/toefl/pdf/mybest_su.pdf

(5) 受験者用個人アカウントページ「My TOEFL Home」のリニューアル

テスト日程・会場検索、受験申込、スコアの確認、スコアレポートの送付手続などを行う TOEFL iBT テスト受験者用の個人アカウントページ「My TOEFL Home」も全面リニューアルされました。このリニューアルによって、全ての Apple® および Android™ デバイスからの利用が可能になりました。また日本語表示や、Google Maps™ での会場検索機能が加わるなど、さらに受験者にとって利用しやすくなりました。「My TOEFL Home」は以下の URL より作成可能です。

My TOEFL Home : www.ets.org/mytoefl

新テストフォーマットに対応した準備教材

ETS では、2019 年 8 月 1 日以降のテストフォーマットの変更に伴い、新しい問題数に対応した準備教材もご用意しています。

これから TOEFL iBT テストの勉強を始めるといふ初学者には、ETS が提供する無料のオンライン講座「TOEFL® Test Preparation: The Insider's Guide」がお勧めです。ETS のインストラクターが TOEFL テストの全セクションについて英語で解説するビデオを見たり、サンプル問題、ショートクイズなど様々な素材を使用して TOEFL テストについて知るインタラクティブな講座内容です。登録から 6 週間は無料で受講できるので、ぜひチャレンジしてください。

「TOEFL iBT® Free Practice Test」は、TOEFL iBT テストの全 4 セクションについて、テスト時間が短縮された新フォーマットと同じ問題数をご自分のパソコンで体験することができます。³ Reading、Listening セクションは解答付き、Speaking、Writing セクションもサンプル回答が付いているので、回答の際のヒントが学べます。無料で繰り返し利用できるのも、自己学習にご利用ください。

またインターネット形式で受験する TOEFL iBT テストの対策には、テスト本番と同じ環境での学習、つまり PC を利用した学習をお勧めしています。「TOEFL iBT® Complete Practice Test」は、過去に実際のテストで出題された問題を使って作成されていて、画面操作もほぼ本番と同じなので模擬試験としてご利用いただけます。また自動採点機能により Speaking、Writing セクションを含めた全てのセクションのスコアも確認できるので、ご自分の実力試しやテスト受験直前の最終確認に最適です。

上記でご紹介した準備教材は以下の Web サイトよりご利用いただけます。

- ・ TOEFL® Test Preparation: The Insider's Guide
www.ets.org/toefl/insidersguide

- ・ TOEFL iBT® Free Practice Test
www.ets.org/toefl/ibt/prepare/free_practice_test

³ Free Practice Test は TOEFL iBT テストのシミュレーションではなく、一般的なテスト体験を提供することを目的としているため、一部の機能は実際のテスト受験の際に画面に表示されるものとは異なる。

・ TOEFL iBT® Complete Practice Test (TOEFL® テスト公式教材ショップで購入可能)

www.ciee-onlineshop.jp/fs/cieeonlineshop/online/tpo

国内の大学入試から海外留学、就職までグローバルに活用できる TOEFL® テスト

TOEFL iBT テストは、海外留学の際の入学選考の他にも、奨学金選考、海外派遣選考、単位認定など様々な場面で利用されていて、近年では日本国内の大学入試や単位認定での活用も進んでいます。2018年に弊協議会で実施した調査によると、337校（有効回答数560大学）の大学が、一般入試、AO入試、外国人留学生入試、帰国子女入試、指定校推薦入試などの入学選考において、TOEFL iBT テストのスコアを利用していることがわかりました。また単位認定で利用している大学も232校（有効回答数518大学）に上りました。⁴

また海外に目を向けると、米国、カナダはもちろんのこと、英国ではRussell Group⁵の構成団体すべてを含む98%以上の大学、そしてオーストラリアとニュージーランドでは全ての大学で利用されるなど、世界の幅広い国に受け入れられています。またTOEFLテストはフランス、ドイツにおいて推奨されており、カナダでは特に大学院課程で活用されています。⁶ ぜひTOEFLテストを受験して、皆さんの「海外留学」という夢を叶える第一歩を踏み出してください。

TOEFL® テストに関するリンク

1. CIEE Japan TOEFL iBT® テスト 団体・教職員向けサイト <https://www.toefl-ibt.jp/>
2. CIEE Japan TOEFL iBT® テスト 学習者向けサイト <https://www.cieej.or.jp/toefl/>
3. ETS TOEFL® テスト公式 Web サイト <https://www.ets.org/toefl>
4. ETS TOEFL® Go Anywhere <https://www.toeflgoanywhere.org>



1



2



3



4

※TOEFL および TOEFL iBT はエデュケーショナル・テストング・サービス (ETS) の登録商標であり、CIEE Japan は ETS の許諾の下に使用しています。

⁴ 出典：一般社団法人 CIEE 国際教育交換協議会 TOEFL 事業部編「TOEFL iBT® テストスコア利用実態調査報告書 2018 年版」

⁵ <https://www.russellgroup.ac.uk/>

⁶ 出典：<https://www.toeflgoanywhere.org/what-is-toefl>

【事例紹介】

ドイツ留学と DAAD 奨学金

Study in Germany and DAAD scholarships

ドイツ学術交流会 日本人向け奨学金プログラム担当 久留島 義信

KURUSHIMA Yoshinobu

(Scholarship Program Coordinator for Japanese Students, German Academic Exchange Service)

キーワード：ドイツ留学、奨学金

はじめに

世界的に見て、近年ドイツへの留学生数は増加傾向にある。その大きな要因のひとつとなっているのが、経済的な負担の低さである。ドイツの大学は主に各州によって管轄されており、2017年にバーデン=ヴュルテンベルク州がEU圏外からの外国人留学生に対して授業料支払いを義務化したことを除き、その他の州では基本的に授業料と銘打った費用は2019年現在、徴収されていない。EU圏外の外国人から授業料を徴収しない国は、英語圏と比べて相対的に学費の安い欧州においても珍しい存在となりつつある。また、ドイツの大学国際化を目指す上で、英語によるプログラムの充実を図った結果、現在では多くの課程で英語による学位取得プログラムが提供されている。そのため、相対的に膨大な費用が掛かる英語圏への留学の代替国として、その高い教育レベルで元来より定評のあったドイツの大学へ留学を目指す学生が増加傾向にあると推測することもできる。

このような背景において、我々ドイツ学術交流会（Deutscher Akademischer Austauschdienst）（以下、「DAAD」という。）がドイツ留学を目指す学生に対してどのような支援を行っているのか、以下、紹介をしていきたい。

1. DAAD について

1925年に設立されたDAADはドイツの大学と学生組織が共同で運営する団体で、本部をドイツのボンに置く。他にもドイツ国内にベルリン首都支局、海外事務所15ヶ国、またインフォメーションセンターを世界57都市に設けている。活動の主な拠出金はドイツ連邦外務省、教育・研究省、EU等の公的資金である。DAADは①優秀な人材に対する奨学金の支給、②学術協力に関する専門知識、③国際化のための機構、という主に3つの戦略的分野を設けて活動を行っている。本稿では主に①について後

半部で述べていきたい。

2. ドイツ留学について

冒頭に述べたように、世界的なドイツ留学への熱は年々高まりつつある。UNESCO の統計¹によると、2016年にドイツは、米国・英国・豪州に次いで人気の留学先であり、非英語圏においては最も選ばれた国であった。また、DAAD がドイツ政府と共に掲げた2020年までに外国人留学生数を35万人にまで増やすという計画は、2016/17年度の冬学期時点で既に達成することができた(358,895人)。さらに、ドイツにおける外国人留学生数は2000年代中盤に一時伸び悩む傾向が見られたが、2009年以降は常に上昇し続けている(グラフ1参照)。2018年の留学生数は374,583人であり、ドイツ連邦統計局によると2019年には39万人を超える見通しとなっている。このことから、今後数年内に外国人留学生数は40万人を超えることが確実であると推測される。

世界的に、留学をする学生数は上昇傾向にあるが、その中でもドイツが安定して外国からの留学生数を増やしている理由としては幾つか挙げることができる。まず、初めに述べたように、ドイツ留学は主要な英語圏への留学と比較し、経済的な負担を抑えることが可能である。学籍登録をする際に学期ごとに共済費(約100~350ユーロ、各大学で異なる)というものが発生するが、授業料に関しては私立大学やバーデン=ヴュルテンベルク州の大学(1学期ごとに1,500ユーロ)、また一部の例外を除き、基本的に徴収されない。共済費について補足をする、その支払いと引き換えに、殆どの大学でSemesterticketという日本でいう公共交通機関乗り放題定期券のようなものが発行されるため、地域内の交通費は基本的に掛かることはない。また、その他の生活費に関しても日本と比べて決して高くはなく、都市によっても異なるが、家賃等も含めた平均的なひと月の生活費は819ユーロである。経済的な負担によって留学を諦めてしまっていた学生にとって、ドイツが場合によってはその受け皿となる可能性もある。

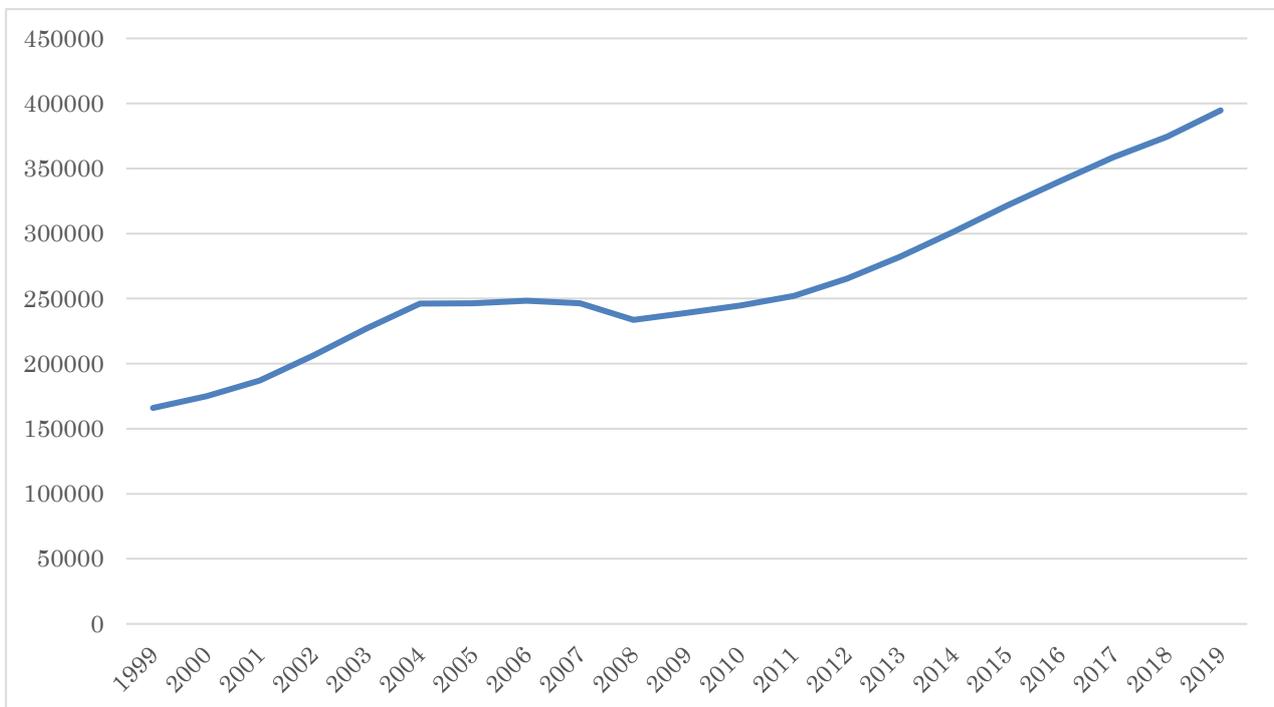
また、経済的な面だけでなく、ドイツの大学の教育・研究の質の高さもドイツが留学先として選ばれる理由のひとつである。英国の教育専門誌Times Higher Education (THE) が毎年発表している世界の大学ランキングによると、2019年はTop100にドイツの大学が8校、Top200まで含めると計23校もランクインしている(ちなみに日本からは東京大学と京都大学の2校がTop100にランクイン)。なお、ドイツの大学はTHEランキングの常連となっており、ここ数年では20校以上が常に上位にランクインしており、客観的に見てそのレベルの高さをうかがうことができる。実際にドイツに留学をしている外国人を対象に2016年に行われた調査では、ドイツを留学先と選んだ理由として「教育の質の高さ」や「国際的に名高い大学」、「良い学習環境」などが主に挙げられている。

¹ DAAD, Wissenschaft weltoffen 2019, p.18, http://www.wissenschaftweltoffen.de/publikation/wiwe_2019_verlinkt.pdf#search=%27DAAD+Wissenschaft+weltoffen+2019%27

さらに、近年の英語による学位取得プログラムの充実により、ドイツ語を学習していない学生であってもドイツ留学が身近なものへとなりつつある。とりわけ修士課程においては、文系・理系を問わず多くのプログラムが提供されており、現在では1500を超える課程で英語だけで学位取得が可能となっている。なお DAAD では、英語で学位取得可能な課程も含め、自分に合ったドイツの大学での課程を検索できるデータベースをホームページで提供している。興味のある方は是非ご活用いただきたい²。

他にも、ドイツは9ヶ国に陸続きで囲まれており、欧州の中心に位置しているという地理的な利点や、ドイツ語という欧州で最も話者の多い言語（約1億人）を留学中に習得できるといった点などを含め、ドイツには留学を志す学生をひきつける魅力が多く存在する。

【グラフ1：ドイツの大学における外国人留学生数の推移】



出典：Statistisches Bundesamt, 2019

3. DAAD 奨学金プログラム

奨学金の支給は DAAD の主な活動分野のひとつである。助成活動を通じて、将来を担う専門家やリーダーとなりうる学生・研究者に、世界最高レベルの大学や研究機関での研鑽の機会を提供している。DAAD の奨学生には、留学経験を通じてドイツという国に対して特別な親近感を持ってもらい、そして留学中に持続可能な国際的ネットワークを構築することが期待されている。

DAAD は昨年、145,188 人（ドイツ人：81,508 人、外国人：63,680 人）に対して助成を行い、1950 年

² <https://www.daad.de/deutschland/studienangebote/studiengang/en/>

からの統計でこれまでに240万人（ドイツ人：約140万人、外国人：約100万人）に上る。なお、日本人の最初のDAAD奨学生は1933年から1935年までベルリン大学（現フンボルト大学）に留学をしていた日本画家の東山魁夷であり、彼を含め、第二次世界大戦前にはすでに36名の日本人奨学生がDAADの支援を受けてドイツへ留学をしていたことになる。それから80年余りが経過し、これまでに多くの日本人がDAADの支援を受けドイツへの滞在を実現した。なお、昨年の日本人受給者の数は、個人応募およびプロジェクト助成も含めると135人であった。個人応募の奨学金においては、とりわけ修士課程での助成を希望する学生の数が目立った。これまではドイツ語での留学希望者が多かったのに対し、近年では上記に述べたドイツの大学における英語プログラムの充実もあり、英語での留学を希望する学生数が応募者の半数以上を占めるようになっている。また、応募者数もここ数年は増加傾向にあり、このことから学生の間でドイツ留学に対する関心が高まってきていると感じることができる。

以下、DAADが大学生を対象に提供する個人応募の奨学金を紹介したい。奨学金の種類は、学部生が応募できる短期のものから、ドイツで修士以上の学位取得を目指す長期のプログラムまで幅広く提供されている。なお、DAAD奨学金は給付型のため、返済は不要である。

①留学奨学金（修士）

対象

ドイツまたは日本で修士号取得を目指す者

支給期間

10～24ヶ月

支給内容

月額850ユーロ、航空券補助、健康保険料、研究補助費、家賃補助、ドイツ語研修補助費

応募締切

毎年10月上旬ごろ（支給開始は翌年の10月）

審査方法

書類審査および面接

②芸術奨学金（修士）

対象

ドイツまたは日本で芸術分野（音楽、美術、演劇、建築、映像など）での修士号取得を目指す者

支給期間

10～24 ヶ月

支給内容

月額 850 ユーロ、航空券補助、健康保険料、研究補助費、家賃補助、ドイツ語研修補助費

応募締切

プログラムによって異なる（支給開始は翌年の10月）

審査方法

書類審査

③研究奨学金（博士）

対象

ドイツまたは日本で博士号取得を目指す者

支給期間

7～48 ヶ月

支給内容

月額 1,200 ユーロ、航空券補助、健康保険料、研究補助費、家賃補助、ドイツ語研修補助費

応募締切

毎年10月上旬（支給開始は翌年の10月）

審査方法

書類審査および面接

④ドイツ語研修奨学金（学士～博士）

対象

支給開始の時点で日本の大学の学部3年生以上に在籍する学生で、春または夏にドイツの大学で行われるドイツ語コースに参加する者

支給期間

1 ヶ月

支給内容

950 ユーロ、航空券補助、健康保険料

応募締切

春講座：毎年11月上旬（支給は翌年2～3月の間の1ヶ月）

夏講座：毎年12月上旬（支給は翌年6～11月の間の1ヶ月）

審査方法

書類審査

ドイツの大学の多くの修士課程は2年間となっているため、上記の奨学金でその期間を全てカバーすることが可能である。また、ドイツで博士号を取得する場合は最長4年間の手厚い支援が行われる。また、短期のドイツ語研修奨学金を利用して、長期留学前にドイツという国を知っていただくのも良いかもしれない。なお、募集要項は毎年内容が変わるため、奨学金の詳細についてはDAADのホームページを参照し、常に最新情報を確認していただきたい。<https://www.daad.jp/scholarships>

奨学生は帰国後、DAADの同窓会である「DAAD友の会」に所属することができる。所属会員は現在1000名を超えており、各地で行われる定期的な会合の場で同窓生同士の交流を深め、更なるネットワークの構築が行われている。さらには、DAAD同窓生が応募できる再招待奨学金といったプログラムもあり、帰国後も様々な機会での支援の場が提供されている。

おわりに

ドイツの大学国際化推進により、これまでドイツを留学先の対象として認識していなかった層（英語圏留学希望者、非ドイツ語学習者）にとって、選択肢の枠が広がりつつある。非英語圏の中で最も多くの留学生を抱える国として、今後もその数は増加すると推測される。DAADは今回紹介した個人応募の奨学金制度だけでなく、日独双方の大学交流を目的としたグループ研修旅行の助成や、日独の学生や研究者の相互派遣を支援する研究プロジェクト助成など、様々な側面から日本人のドイツ留学支援を行っている。学生や研究者の状況に応じて各プログラムを是非活用していただきたい。

【主要参考文献等】

1) DAAD, Wissenschaft weltoffen 2019

2) Statistisches Bundesamt: (2019年10月15日にアクセス)

https://www.destatis.de/DE/Themen/Gesellschaft-Umwelt/Bildung-Forschung-Kultur/Hochschulen/_inhalt.html

【海外留学レポート】

海外医学部という選択肢

－ 国境を超えて医療をもっと身近に－

Choices of oversea medical schools

順天堂大学附属順天堂医院 総合診療科 国際診療部 医師 尾崎 功治

Dr OZAKI Koji

(Juntendo Hospital Department of International Healthcare)

キーワード：海外医療、インバウンド、医療ツーリズム

1. はじめに

私は2008年9月から2014年7月まで約6年間北京大学医学部に留学をした。

両親ともに生粋の日本人であり、留学するまで中国はおろか海外と全く接点のなかった私が突如、海外留学を決意し、現地でゼロから中国語を学び、日本・中国両国の医師ライセンスを取得し医師になるまでのエピソードを紹介したいと思う。

これまでの私の留学経験がこれからまさに海外留学を考えている皆さんのラストワンマイルを後押しできれば幸いだ。

2. 中国留学のきっかけ

子どもの頃から少し人とは違ったことをするのが好きだった。

はじめて医学に興味を持ち始めたのは中学生の頃からであったが、ただ医者を目指すのではなく「将来、医学を生業にするのであれば何か面白いこと、他人にはできないことがしたい」と考えていた。

中学を卒業後、県内公立高校に進学し日々テニスと趣味のパソコンに明け暮れていた私の目に偶然飛び込んできたもの、それが「中国」であった。

当時高校2年生であった2007年は翌年の北京オリンピックを控えて盛り上がる北京の街並みや熱気あふれる中国の様子が連日メディアで取り上げられており、圧倒的な人口と中国ならではのスケール感に加え、何とも言葉では表現できないほどの人々の活気に魅せられ、このとき漠然と「中国



語は将来、強い武器になる」と直感したことが留学のきっかけだった。

突然、中国への留学を決めた私に対して、周りの友人からはよく「両親は中国人なのか」「昔、中国に住んでいたのか」と聞かれることが度々あったが、前述の通り当時恥ずかしながらも中国語は全く話すことができず、いざ現地についても唯一話せる言葉、それは「ニーハオ」だけであった。

こんな私の無謀ともいえる留学を一番応援し支えてくれた存在は両親であり、そして現地で知り合った世界各国からの友人であった。

3. 大学生活

振り返ってみると語学研修や病院実習などを含めて中国で過ごした9年間は語学と医学に本気で取り組んだ9年間であった。お店でもタクシーでも言葉が通じず本当に苦労した記憶は今でも鮮明に覚えている。タクシーで運転手に目的地を告げるも、発音が正しくないことから目的地とはほど遠い場所に到着してしまうことや、出前でも注文したはずのない商品が届くことは幾度となくあった。今では帰国後の土産話として笑いの種にしているが、当時の私にとってそれは現地で生活していくことができるかできないかの死活問題であった。



左端が筆者

この言語の壁を打壊すべく、当初はまず予科コースという中国語だけを学ぶ1年間のコースに入学し、1年間でむしやりに中国語を勉強した。そんな私は語学が非常に不得意であった。中国語の漢字は簡体字で日本の漢字とは少し異なっていたが、似通った部分は多かったことからおよその意味は推測できたが、問題はリスニングとオーラルだ。発音が日本語とは全くことなり微塵も聞き取ることができなかった。

こうなると解決方法はひとつ、ひたすら勉強するしかなく、朝から中国語の授業を受講しては、午後自習室やカフェで猛勉強した。隣に座っている中国人にも沢山話し掛けた。今思うとコミュニケーションお化けだ。そして分からないことはスマートフォンに記録しては家に持ち帰って調べる、連日そんなことを繰り返し勉強をしていた。

結果、こんな私でも毎日中国語のシャワーを浴び続けることで兼ねてより心配していた言葉の壁は1年も経たないうちにあっという間に解決し、この時「人間本気になればなんとかなること」を実感し、今でもこの経験は私の中で忍耐の礎となっている。

語学研修を終えて晴れて大学生活が始まったが、6年間の大学生活は決して平凡なものではなく、

ほぼ毎月のように押し寄せてくる定期試験をはじめ、実験レポートの作成・提出に日々追われ続ける毎日であった。しかしいつも自分に「今の苦労は人生の中で踏ん張りどころ」と言い聞かせ己を奮い立たせながら、目先の試験や勉強に常に全力で取り組んできた。

4. 卒業後の進路

6年間の医学部生生活を終え、無事に北京大学を卒業してからは国家試験の連続で時間はあっという間であった。中国での1年間の病院研修を経て2016年に中国の医師免許を取得。その後日本に帰国し、翌2017年に日本の医師免許も取得し、約10年余りの歳月を経て、日本で医師として、キャリアをスタートさせることができた。

現在は都内大学病院に新設された国際診療部にて海外から先進的な日本の医療を求めて来る外国人患者の受け入れ業務をメインに行っている。来日する外国人のうち大半を占めるのは中国からの患者であり、中国医療に関する知識や語学力を日々存分に発揮できる最高のステージだ。現在も毎月のように中国と日本を行き来しながら、日本・中国における医療の架け橋として医療の国境をさらにボーダーレスにするため日々職務にあたっている。

国が違えば保険制度、文化、習慣、医療に対する知識・背景、何もかもが違う。これを一つ一つ課題解決していくことが今の仕事の最大の醍醐味だと私は確信している。

今後、国際診療部という職場で培った取り組みをもとに、よりスムーズかつ安全に海外の患者を受けいられる仕組みを構築し、全国の医療機関にとってもモデルケースとして求められるような体制を作り上げていくことが長期的な目標だ。

5. まとめ

一言で「留学」といっても、住み慣れた日本を単身離れ、異国の地で生活・勉強するということにはそれなりの度胸と覚悟が必要だ。そして留学は一人で成し遂げられるものではなく、家族を含めた周りのサポートも必須条件であることを忘れてはいけない。

私自身の考える使命は、常にグローバルな観点でこれまで届かなかった患者へ確実な医療を届けること。今こうしてこれまでの海外医療の経験を自分にしかできないポジションで発揮できることにこの上ないやりがいを感じている。まずは得意とする中国、次いで世界中の医療機関が連携して患者の治療が行えるような世界を思い描いている。本当に治療を受けたい患者が最低限のコストで治療を受けられるような世界を作ることに生涯チャレンジしていく心積もりだ。

海外へ留学し結果を得ることは決して容易なことではないが、逆を言えば実現できないということもない。アグレッシブな若い時期だからこそ挑戦できることもたくさんあると私は思っている。少し遠回りをしてでもやりたいことを目指して突き進むことは長い人生から見るとほんの一瞬の出来事

であり、これから留学を考えている皆さんについては「将来のなりたい自分」を目指して自ら切り拓き突き進んでいってくれることを期待している。

【海外留学レポート】

意志あるところに道は開ける

-留学を通して得られた人生経験-

Where There's a Will, There's a Way.

英国ロンドン大学シティ校卒業（金融ジャーナリズム修士号） 瀬口 美由貴

SEGUCHI Miyuki

(Graduated from City, University of London, with a Master's degree in Financial Journalism)

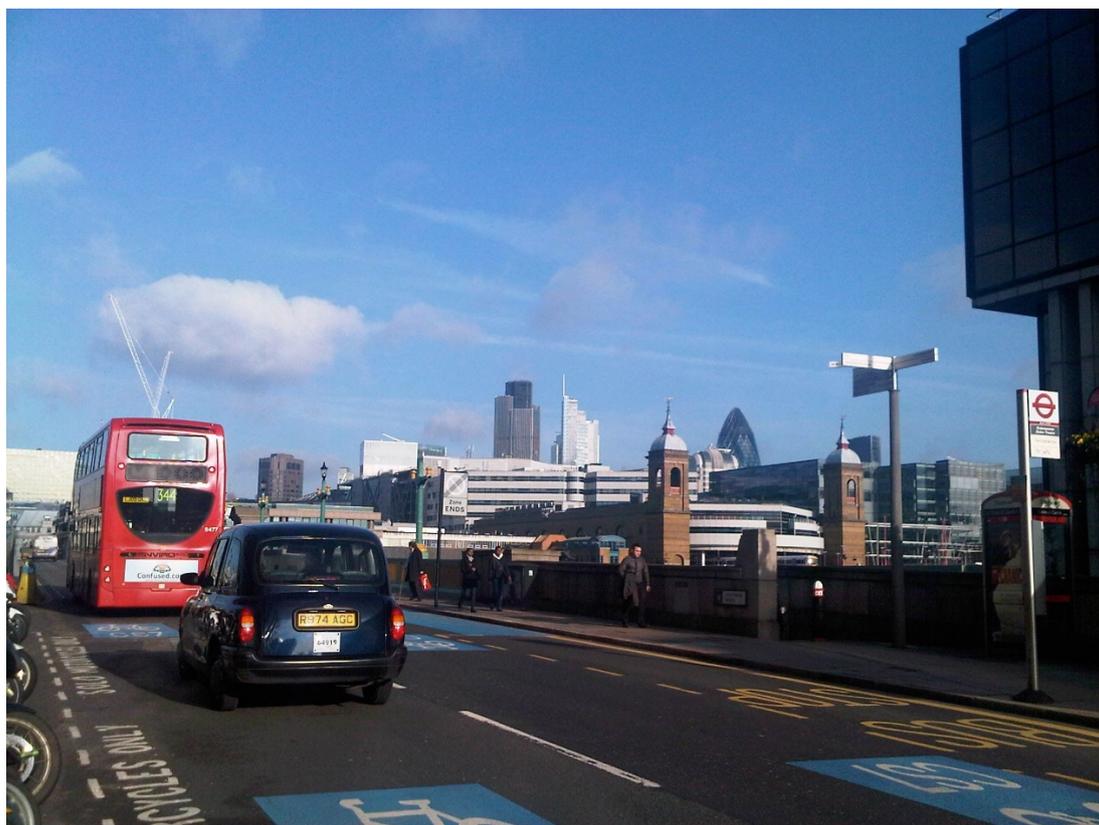
キーワード：イギリス、正規留学

はじめに

私は、岐阜県内の高校を卒業後、18歳で渡英した。スコットランドの東海岸に位置するセントアンドリュース大学の学部進学ファンデーションプログラムで学び、その後、イングランドのオックスフォード・ブルックス大学で英語と言語学の学士号、ロンドン大学シティ校で金融ジャーナリズムの修士号を取得した。

留学を通して得られたものは数えきれない。日本という慣れ親しんだ環境から飛び出して英語を習得したことで活躍できる世界が広がった。異なる文化的背景を持つ人との出会いを通して視野を広げ、様々な考え方を受け入れられるようになった。そして、こうして拡大した可能性のなかから、目標を見つけ出し、意志を持って行動することで道を切り開くことを学んだ。これらの経験は、その後の人生を生きるための土台となっており、自分自身の自信につながっている。

これまでに、光栄にも、日本学生支援機構の海外留学フェアをはじめ、多くの留学関連イベントに協力させて頂く機会を頂き、海外留学を志す学生や中高生、その親御さんから多数の質問や相談を受けてきた。このレポートを通して私自身の留学体験を紹介させて頂くことで、留学を考えている皆さんの不安や疑問が少しでも解消され、次の一步を踏み出すきっかけを作ることができたら心より嬉しく思う。



イギリスの首都・国際的な都市ロンドン

留学という選択

幼いときから異文化や外国に関する興味や関心があり、海外生活を通して自分自身の可能性を広げてみたいという好奇心は人一倍強かった。小学校の頃に英会話スクールに通い、高校では英語部に所属し、異国の人とコミュニケーションをとることに楽しさを覚えた。ただ、渡英するまでに英語圏を訪れた経験はなく、英語力に自信があったわけでもなかった。そのため、高校在籍時に海外の大学への正規留学を決めたことは大胆な選択だったと思う。幸運なことに、勇気を持って私の意志を尊重してくれ、学生生活を通して精神的にも金銭的にもサポートをしてくれた両親の存在があった。この場を借りて両親へ感謝の意を伝えたいとともに、このような家族からのサポートは実りある留学を実現するために重要な要素であることを強調しておきたい。

留学先を決めるにあたっては、日本の予備校が経営していた留学支援エージェントを利用した。アメリカやオーストラリアという選択肢もあったが、歴史や文化に興味があった私は大きいためらうことなくイギリスを選択した。そのエージェントを利用する特典として提携大学のファンデーションプログラムを修了すればエスカレーター式に学部進学できる制度があり、オックスフォードやケンブリッジに次ぐ歴史を持ち、質の高い教育や研究で評価の高いセントアンドリュース大学で学ぶことを決めた。

はじめての渡英

高校卒業後、渡英するまでの10週間で事前研修に参加し、基本的な英会話をはじめ、西洋の文化や慣習、イギリスの地理について勉強した。研修を通して、ともにイギリス留学をめざす仲間と出会い、悩みを共有しながら励まし合った。

2003年7月、生まれて初めての長距離フライトを経験し、渡英した日のことは今でも鮮明に覚えている。十数人の仲間とともに、成田空港を午前中に出発し、ロンドン・ヒースロー空港を經由し、エディンバラ空港へ。そこからマイクロバスに乗り換え、セントアンドリュースにある大学寮に到着したときはまだ明るかった。夏のセントアンドリュースは夜10時頃まで明るいということもカルチャーショックだったが、見るものすべてが新鮮で映画『ハリーポッター』シリーズに登場しそうな風景が目の前に広がっていたというのが第一印象だった。

夏の間は、本格的な学部進学ファンデーションプログラムが始まる前の準備コースだったが、英語を英語で学ぶというイギリスでの学習は日本でこれまで学んでいた英語とは全く異なるものを感じられ、単語をつなぎ合わせて文章にして伝えることができるようになるまでには数か月の期間を要した。一緒に渡英した仲間のなかには幼少期に海外で生活していたり、海外旅行経験が多く英語力に自信があったりする学生がほとんどで、最初は授業のなかで発言することさえもできなかった。

英語圏での留学生活の難しさは授業だけではなく、寮に戻っても、週末になっても英語でのコミュニケーションから逃れられないことだ。英語力を向上させるためには最も適した環境である一方、はじめて家族と離れ、異国の地で暮らし、英語を使うことに慣れていなかった私にとって、渡英してからの数か月は本当に辛い時期だった。

困難を乗り越える

この困難を乗り越えるために、私は、日本人以外の人と英語を話す機会をできる限り作ることにした。自分から話しかけるには大きな勇気が必要だったため、相手に話しかけやすいと思われる雰囲気を出すことを意識して常に笑顔でいることを心掛けた。休み時間になると、何かと話題を見つけて職員室に出かけては先生や事務のスタッフと話した。また、夏の間は短期間の英語習得プログラムを受講していたイタリア人やスペイン人のグループと積極的に交流した。授業後には一緒に食事をしながら歓談し、週末には近郊の街へ日帰り旅行をしたりして友情関係を築くことで、英語力を楽しく上達することができただけでなく、英語圏以外の国の文化についても理解を深めることができた。

夏が終わり、大学の新学期が始まると、イギリス人や英語圏の学生が多く暮らす、3食付きの学生寮で生活し、現地の人と話してきた英語や日常会話、イギリスの文化や慣習についても徐々に慣れていった。

学部進学ファンデーションプログラムでは、韓国や中国、台湾など他のアジア諸国からの学生とと

もに、学部入学後に専門的な知識を学ぶために必要なスピーキングやリスニングに加えて、イギリスの大学の授業に必須のプレゼンテーションや、授業の板書スキルを学ぶノートテーク、エッセイライティングなど実践的な内容を学んだ。

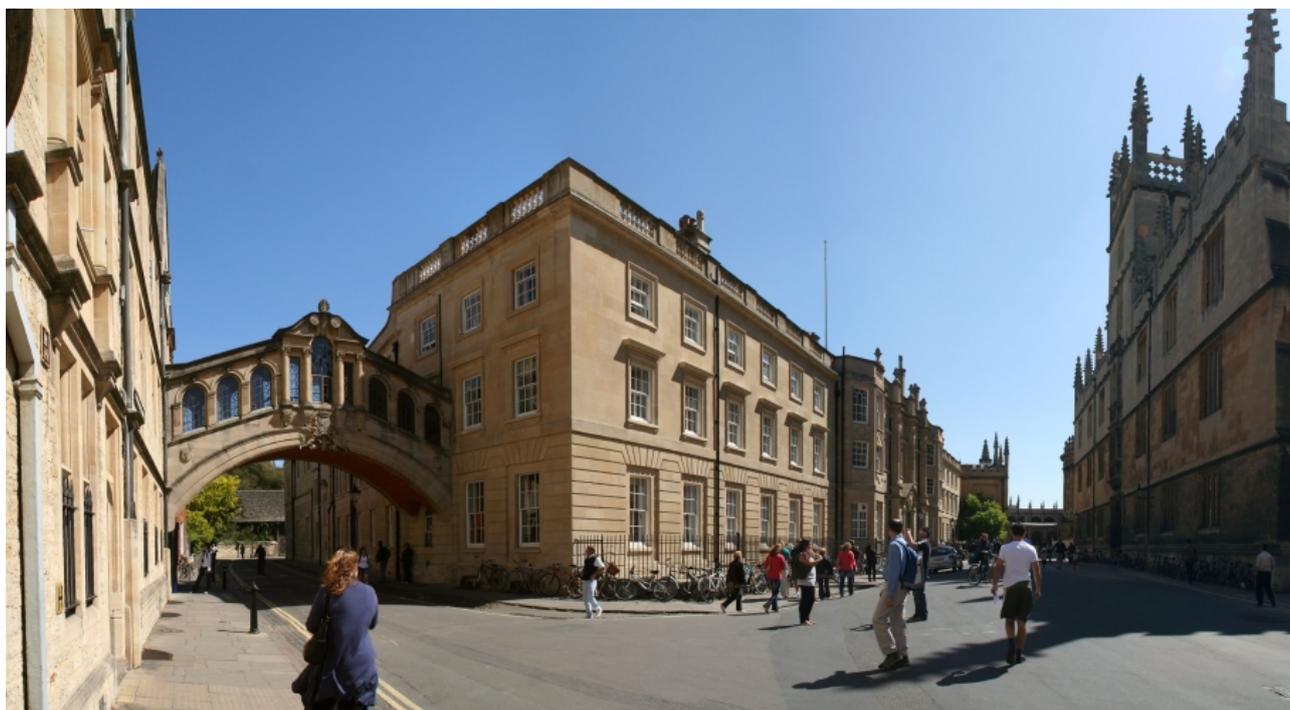
週末や長期休暇の際には、日本人の仲間や外国人の友達とイングランド北部をはじめ、エディンバラやグラスゴーなどのスコットランドの都市へ出かけ、歴史的建造物を見学し美術館や博物館を訪れるなかでイギリスの歴史や文化に関する見識を広げた。



留学中はスコットランド名物バグパイプの音色に癒された

オックスフォード

英語でのコミュニケーションに慣れてくると、進学先の選択肢としてイングランドの大学を希望するようになった。数年間という大学生活を過ごすのであれば、都市からのアクセスが良く過ごしやすい場所が良いと考えたからだ。いくつかの候補先を検討したが、キャンパス見学のために訪れたオックスフォードの街は大きすぎない規模で、歴史や自然を感じられ、理想的な環境だった。市内からも遠くない距離にメインキャンパスを構えるオックスフォード・ブルックス大学は、専攻科目が充実しており、この大学への進学をめざすようになった。



美しい自然と歴史的建造物が融合するオックスフォード

世界中から集まった学生と観光客らで賑わう

私の場合、セントアンドリュース大学に進学する場合は特別な試験を受けなくても入学することが可能だったが、それ以外の大学に進学するには学部進学ファンデーションプログラムを修了し、IELTS 試験で一定の点数以上を取得することが必須条件だった。IELTS 試験はリーディング力やリスニング力のほかに、スピーキングやライティングの能力を含めた総合的な英語力を測るテストで、英語力の強化が求められた。一緒に渡英した仲間の多くはセントアンドリュース大学に進学することを決めるなか、私は、IELTS の模擬テストを何度も繰り返し行い、毎日ラジオを聴き、放課後も週末も英語力向上のために努力し続けた。

その結果、無事に志望大学への進学が叶い、オックスフォードでの学生生活を始めた。英語を母国語とするイギリス人の学生のなかで授業についていくためには、課題の提出であっても試験勉強であっても、常に彼らの何倍もの努力をしなければいけない環境だった。ただ、この頃までには、英語でのコミュニケーションは不自由ないものになっていたし、現地の暮らしにも慣れていたのでイギリス

生活を満喫できるようになっていた。

勉強の合間には、オックスフォードの中心街にある土産物店でアルバイトをしていた。少しでも生活費の足しになればと始めたアルバイトだったが、大学以外で現地の人々と交流しながらイギリスの職場環境や文化、慣習など多くのことを経験する良い機会となった。また、週末や長期休暇には、電車や格安航空会社（LCC）を利用してイギリス国内はもちろん、欧州各地を旅行した。世界的に有名な観光名所を訪れ、芸術作品や演劇、舞台を鑑賞する機会にも恵まれた。

卒業後の進路

卒業が近づくとつれ、四年間という期間をイギリスで過ごすなかで自分自身の故郷である日本をより良く知り、その経験をもとにグローバルな舞台で働きたいと考えるようになっていた。ただ、イギリスにいながら日本を拠点とする企業への就職活動を行うのは難しい。私が卒業した頃は通年採用をしている企業も多くなかったため、日本に帰国してから東京で開催された海外大学の卒業生向けキャリアフォーラムに参加したり、インターネットでリサーチしてそのタイミングで募集のある仕事に応募したりするしかなく、出遅れての就職活動だった。

大学では英語の言語学を学んでおり、そのなかでも新聞やラジオ番組から書き言葉や会話の分析をする授業が好きだったことがきっかけとなり報道機関での仕事に興味を持っていた。そんななか、東京を拠点とする航空旅行業界紙が英語を話せる記者を募集していることを知り、就職につながった。

私の仕事は海外の航空会社をはじめ、外国の政府観光局や外資系ホテルの経営者を取材したり、海外のデスティネーションを視察したりして、記事にまとめることだった。本国からCEOらが来日して開いた記者会見に出席したり、各国の旅行業界関係者の個別インタビューを行ったりするなかで、英語を使用して外国人幹部を取材する機会も多かった。

数年経った頃、ある大きな記者会見で、金融や経済ニュースを専門に扱う外資系の通信社や、米国や英国を代表する経済紙の記者と同席し一緒に取材する機会を得た。私の隣に座っていた記者が書いた記事はトップニュースとして世界中に伝えられ、国際的な報道機関だからこそ生み出せる大きな影響力を感じた。それ以来、国際的な報道機関の英語で書ける記者になることをめざすようになった。

二回目の留学

それからは、この目標を実現するためにひたすら行動した。知り合いになった外資系通信社や新聞社の記者から、英語のネイティブでない日本人が入社することは極めて狭き門ではあるが、入社する社員は大抵ジャーナリズムの修士号を持っていると聞き、大学院へ進学することを決めた。候補となる大学をリサーチし、その分野で世界的に評判が高く、金融ジャーナリズムの修士課程を新設予定だった、シティ大学ロンドン校を見つけた。入学願書を提出する前に渡英してキャンパス見学をするこ

とは叶わなかったため、日本で開催された留学フェアに参加し、希望する修士課程プログラムやロンドンでの生活について大学の担当者に質問し疑問点や不安なことを一つずつ解消していった。大学の担当者とはその後も定期的にコミュニケーションをとり、スムーズに大学生活が送れるように準備を整えた。

何も分からない状況で渡英した一回目の留学と比べると、現地での生活環境や留学に備えるための心構えはできていた。ただ、大学院卒業後に明確な目標があったため、卒業後のキャリアにつながりそうな人脈を広げたり、ロンドン滞在中に職務体験ができそうな報道機関や金融機関を探したりして、一回目の留学よりも入念な準備を行った。

また、希望する修士課程プログラムへの入学にあたっては、イギリス国内の大学卒業証明書を持っていても、IELTS 試験で大学入学時よりも高い点数を取得し、与えられたテーマに関する記事を提出し、面接に合格することが求められた。フルタイムの仕事の合間に勉強し、準備を整えることは大変だったが、そうした努力の甲斐があり、金融ジャーナリズム修士課程プログラムの一期生に選ばれた。



金融ジャーナリズム修士課程をともに学んだ仲間たち（右から2番目が筆者）

ロンドンでの生活

ロンドンでは、世界中から集まった12人の学生とともに学ぶことになった。彼らの国籍はイギリス以外に、アイルランド、カナダ、ハンガリー、ケニア、インド、中国と幅広く、みな年齢も文化的背景も異なり、英語を母国語としていない学生は私を含めて数人だった。また、その多くは世界を代表する金融機関や報道機関での勤務経験を持っていた。彼らとともに切磋琢磨しながら世界経済をはじめとした様々な話題について議論を重ねた日々は、その後、多くの国際的な職場でキャリアを積むなかでも大いに役立った。

この修士課程プログラムでは10か月という短期間で経済分野の専門記者となるために求められる金融やビジネスの基礎知識を身に付けるだけではなく、取材や記事執筆をはじめ、テレビやラジオの番組制作、ブログの運営、ソーシャルメディアの活用など多くの実践的な課題が与えられた。平日9時～17時は授業に出席し、家に帰っても週末もずっと勉強する忙しい毎日を過ごした。

幸いにも、週一程度の頻度でフィールドワークがあり、イングランド銀行などロンドンの金融経済拠点を訪問してその道のプロから話を聞いたり、BBCやロイター通信、エコノミスト・グループなどの報道機関の本社を見学したりする機会には恵まれた。長期休暇中にはフィナンシャル・タイムズグループの投資情報専門紙でインターンシップを経験し、正社員の記者同様に取材を行い、記事を執筆し、署名入りの記事掲載までつなげることもできた。この頃、プライベートな時間はほとんどなかったが、何ものにも代えがたい価値のある経験ができた日々は充実していた。

卒業までの期間が残りわずかになると、卒業プロジェクトを進めながら最後の試験勉強をする一方、興味のある仕事を見つけては応募し、就職活動を進めた。イギリスで働くことも考えたが、最終的には、世界的な通信社の東京オフィスから仕事のオファーを頂き、日本に戻ることに決めた。



インターンシップでお世話になったフィナンシャル・タイムズ本社にて

留学を終えて

東京に戻ってからは、希望していた世界を代表する通信社や新聞社で英文記者として働き、英語ニュース番組を放送するテレビ局での仕事も経験した。その後も目標を見つけては意志を貫き実現に向

かって努力する人生を歩んでいる。繰り返しになるが、留学を通して得られたものは数えきれない。自分自身の限界まで挑戦し、困難を乗り越えた先に広がる世界を知った。数多くの素晴らしい出会いを経験し、支えられ励まし合い、感謝する喜びを知った。自分を見つめる時間を経て、自身の成長を実感することができた。これらがあるからこそ、いまの私がいて、いまの人生がある。

新たな一歩を踏み出すことは誰でも不安なことだが、少しでも留学に興味を持っているのであれば勇気を持って進んでほしい。留学を終えたとき、いま考えているよりもはるかに大きいことを成し遂げられる可能性を持っていることに気付けるはずだ。

【インフォメーション】

日本留学プロモーションビデオ公開

Video released to promote 'Studying in Japan'

日本学生支援機構留学生事業部留学情報課

(Information Services Division, Student Exchange Department, Japan Student Services Organization)

キーワード：日本留学、日本文化、プロモーションビデオ

日本学生支援機構では、海外から日本への留学（日本留学）のプロモーションのためのビデオを制作し、公開いたしました。

当該ビデオは、日本を知らない海外の方々が、日本や日本の大学等に興味を持ってくれることを目的に制作したもので、伝統と現代が融合する日本らしさを感じてもらえるよう、武道等で用いられる「心」「技」「体」に「知」を加えた4種類をそれぞれのテーマとしています。

それぞれのテーマが約3分でまとめられており、前半が日本文化、後半が大学等の紹介となっています。

日本文化、大学・研究施設、学生・研究者の映像・画像（一部イメージ）が、音楽とともにダイナミックに次々と展開し、見るものを飽きさせない、また、一度見ただけでとても印象に残る作りとなっています。

そして、日本が海外に誇る様々な分野の技術や制度等が盛り込まれ、「Made in Japan」の卓越した部分も紹介しています。

ユーチューブ（YouTube）で公開していますので、海外でのイベント等でご活用いただくこともできます。

是非一度ご覧ください。

【URL】

<https://www.youtube.com/channel/UCPauS2nacs8vLkhiMY0guaA>

(ビデオ映像の一部)



次号予告

特集「受け入れ促進のための外国人留学生支援」 支援体制、非漢字圏からの留学生受入支援、日系の 受入支援、日本語教育のこれから(予定)

編集後記

先日、布団乾燥機を購入しました。冷え性の私は、寒い時期、中々お布団の中が温まらず、寝付けの悪い日々を毎年過ごしていました。乾燥機が事前にお布団を温めてくれるので、寝付けが良くなりました。

さて、今月の特集は「日本人学生のための留学支援」と題し、事例紹介では「国際舞台へのパスポートTOEFLiBT®アプスターより受験しやすくなったTOEFLiBTテスト変更点のご案内」、 「ドイツ留学とDAAD奨学金」というタイトルでご寄稿いただきました。また、海外留学レポートでは、中国留学とイギリス留学についてお伝えしております。インフォメーションでは、本機構が制作した日本留学プロモーションビデオについて案内させていただきます。

来月号も有意義な情報をお届けいたしますので、どうぞよろしくお願いたします。

(編集部)

ウェブマガジン『留学交流』2019年11月号

Vol.104

令和元年11月11日発行

編集 独立行政法人日本学生支援機構

(編集部)留学情報課

東京都江東区青海2-2-1(〒135-8630)

電話 (03)5520-6111

FAX (03)5520-6121

Eメールアドレス ij@jasso.go.jp

本誌へのご意見、ご感想は、こちらのメールアドレスまでお願いいたします。

Web Magazine “Ryugakukoryu”
(Student Exchanges)

“Ryugakukoryu” delivers a variety of necessary information and materials to faculty and staff engaged in acceptance and dispatch of international students, and educational guidance.

The magazine has been made public online without charge since April 2011.
(Issue date: 10th of each month)